



WWF® for a living planet®

南西諸島における野生生物の 有害化学物質調査 報告会

日時：2007年6月26日（火）午後3時半～5時

場所：石垣市役所2F 会議室

主催：WWF ジャパン

スケジュール：

15:30-15:45 挨拶・調査概要の説明

WWF ジャパン 自然保護室 安村 茂樹

15:45-16:30 報告「野生生物から見えてくる琉球列島の化学物質リスクの現状と課題」

愛媛大学沿岸環境科学研究センター 准教授 高橋 真

16:30-17:00 質疑応答・意見交換

問い合わせ先：

WWF ジャパン （財）世界自然保護基金ジャパン

自然保護室 安村 茂樹

〒105-0014 東京都港区芝 3-1-14 日本生命赤羽橋ビル 6F

Tel：03-3769-1713 Fax：03-3769-1717

前日、当日の連絡先→080-6652-6008

e-mail：yasumura@wwf.or.jp

南西諸島における野生生物の有害化学物質調査概要

■調査目的

南西諸島のサンゴ礁海域は、経済発展の著しい中国・東南アジア諸国に隣接するという地理的観点や多くの希少生物を有する生態的観点から、有害化学物質による影響が懸念されている。潜在的な汚染リスクの実態を明らかにし、サンゴ礁、化学物質に関わる国内外の保全関係者、政策決定者へ、その取り組みの根拠となりうる科学的、客観的なデータを提供し、サンゴの白化現象や赤土流出、オニヒトデ食害と同様、有害化学物質汚染に対する保全活動を促進させる。さらに地域市民グループとの連携を図りながら活動を展開することで、有害化学物質の汚染や問題に関する地域の関心を高めることを目指す。

■調査内容

南西諸島に生息する水棲生物の有害化学物質調査

(2005-2006年度活動)

- i) ウミガメ類、イルカ・クジラ類の有害化学物質含有量の測定(死亡漂着個体を収集)
- ii) 重要湿地に生息する魚介類の有害化学物質含有量の測定、魚類生殖腺異常の観察
- iii) 造礁サンゴの幼若体の褐虫藻取り込みに対する有害化学物質暴露の影響実験

■調査期間

2005年度～2007年度(最長2年延長)

■調査対象・場所

社会的、生態的に重要な地位を占める種を指標生物として用いる。

- ・南西諸島全域(ウミガメ)
- ・琉球列島域(魚介類、サンゴ) ※魚介類は沖縄県内の重要湿地4箇所とその沿岸域を対象
- ・八重山諸島域(イルカ・クジラ類)
- ・東シナ海/太平洋沖合(カツオ)

■対象物質 計153種

調査 i)、ii) POPs(ダイオキシン類、PCB、DDT、クロルデン、臭素系難燃剤などの9物質群)
有機スズ化合物(TBT, DBT, MBT, TPTなど)
微量元素(Hg, Cd, Pb, Agなど約20種類の元素)

調査 iii) 船底塗料含有物質(DCMU ジウロン)
PSII 阻害除草剤(メトリブジン)
赤土(国頭マーヅ)

■調査の背景

- ・全国平均的なモニタリング調査は実施されているが、汚染の Hotspot や生物多様性の高い地域での調査が十分に行われておらず、国内の現状や課題が不透明な部分がある。
- ・カツオを用いた調査では、東シナ海のダイオキシン類、有機スズ類、臭素系難燃剤等の含有量が太平洋、日本海などの沖合と比較して高いことが分かっている(Ueno D et al.(2004, 2005a, 2005b))。
- ・安心して安全な社会生活や生物多様性を維持するために必要な情報公開や化学物質管理制度についての情報や認識が一般には十分に浸透していない。

■調査の特徴

- ・低緯度で生物多様性の高いサンゴ礁環境での調査。これまでは極地や先進国など高緯度地域が中心。
- ・複数の地域 NGO と研究者の連携。地元 NGO や住民は試料収集、研究者は分析を行い、その調査成果は適宜、地元 NGO のネットワークを活用して地元へフィードバック。
- ・調査を通じて、日本の化学物質管理の課題や REACH についての情報提供など普及啓発活動を展開。

■主な共同研究者・協力者(五十音順)

石垣島ウミガメ研究会、イルカ&クジラ救援プロジェクト、愛媛大学沿岸環境科学研究センター田辺信介教授、沖縄環境ネットワーク、沖縄県衛生環境研究所環境生活部、オキナワマリンリサーチセンター、美砂の会、東京大学海洋研究所渡邊俊樹助教授、日本ウミガメ協議会、八重山漁業協同組合、山縣浩海(獣医師)、琉球大学熱帯生物圏研究センター中村将教授